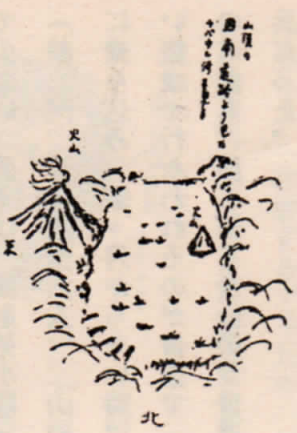
方向

第八八号　一九八八年九月一〇日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

柴野純孝『わだつみをこえて』1988.8.20.　原田憲雄



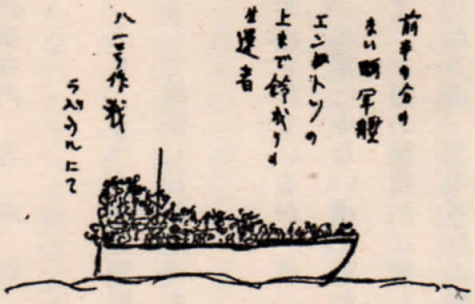
これは、著者が太平洋戦争中、暁部隊の一船舶兵として従軍した記録である。なぜそれを本にしたかを「序」にいう。

〈太平洋戦争に関しては、いろんな人達の体験記録が出されているが、事、海洋に関しては、その犠牲者の莫大な数に比べると、非常に少ない様に思われる。尤も海軍の花々しい戦闘の場面などは別として、一般の輸送船に関しては殆ど無いのではなかろうか。太平洋戦争では約八百万屯、二千五百の船舶が失われ、海没した人の数は四十数万と云われているが、その記録の少ない理由として考えられるのは、一つ、表舞台ではなく裏方であること、一つ、一緒に同じ事を体験した生存者が少ないこと、一つ、各自の体験が千差万別で共通性が少ないこと、一つ、陸上に住む人々とは生活環境が異なるので、その場面を推測することが困難なことによるのであろう。…最近、暖衣飽食の時代を迎えて、戦争の風化等が云われるのを聞くに及んで、戦争の愚かさ、悲しさ、空しさ、又非業の死を遂げた人々の事を思い、いささかでも見聞き体験した事を記して、鎮魂の意を述べんと思う次第である〉　（カットはラバウルの港）

著者の属した暁部隊とはいかなる部隊か。

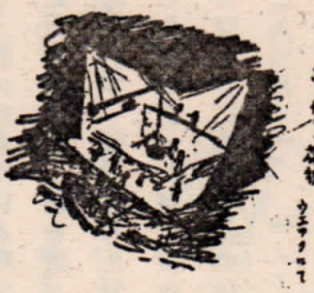
〈昔は、上陸用舟艇、水上運輸、船舶護衛、港湾施設等の係りは一般に、工兵隊、輜重隊、海軍が当たっていたのであるが、太平洋戦争の様な大規模な戦争になると収拾がつかなくなって来た。それで昭和十七年七月、すなわち開戦後、半年も過ぎて漸く、統一機構として暁部隊なるものが造られたのであった。その暁部隊の中で戦争そのものに直接係りあったのは船舶砲兵団と船舶工兵隊である。船舶砲兵団の任務は船舶に乗り込んで船を護衛する事であって、高射砲隊、高射機関砲隊、機関銃隊、山砲隊等がその主なる者である。…自分の入った部隊名は暁二九五三部隊で…船舶砲兵第一聯隊と呼んでいた〉（普通の陸上部隊と違って、共に行動する人員はきわめて少ない。例えば　高射砲小隊（砲二門、人員三十人程）、機関砲小隊（砲二門、人員二十人余）、機関銃分隊（銃二門、五人乃至六人）、山砲隊（砲一門、五人乃至六人）以上のような編成で船に乗り込み、数ヶ月から永い時は一年以上にも亘る。…下船しても、次の乗船は新しい編成で行なわれるのが普通で、…だから、小隊長もなく、中隊長、大隊長、部隊長の名前も、顔も知らないのが普通であった〉なお著者は機関銃分隊員で分隊長は上等兵だった。

昭和十七年十二月三十日、九州の佐伯港でタスマニヤ丸に乗船、十八年一月十日、南太平洋ニュー・ブリテン島のラバウル港に入り、それからラバウル、パラオ諸島、フィリッピンのマニラ、サマル島などのあいだを資材輸送のため往復し、九月、台湾の高雄、馬港を経て日本の因島に帰る。その間、猛烈な空襲に会い、またいわゆる第



八一号作戦にぶつかり、八隻の船団が全滅、護衛艦の二隻沈没、二隻大破し、前半分の無くなった軍艦が煙突のテッペンまで人を乗せて帰ってくるのを見たりする。馬港から内地への航海は二百二十日の台風にぶつかり四日間荒れ続け、一七隻の船団の二隻以外はどうなったか分からない。（前頁カットは前半のない軍艦）

帰ってまもなく、著者の分隊は宇品で辰菊丸に乗船、バラオに行き、そこを根拠にニューギニヤのアイタペやウエワクへ往復する。十九年一月、分隊は日沖機関砲小隊に合流し、ラバウル行きの第一次決死輸送船団の建日丸に乗船。エンジン不調のため、第二次船団の大八州丸に乗り換えた。一次船団がラバウルに着いたという電報で二次船団も出発するが、四日目の朝、護衛艦が発火信号を点滅したかとおもうと、方向を変え、バラオに向かった。一次船団が帰途撃沈され、二次船団の前進不能が分かったためである。これがラバウルへの最後の輸送船であった。（真夜中の荷役）



基地バラオに帰った日沖小隊は山上に高射砲を上げる作業をしながら待機するが、二月六日マーシャル群島の日本軍全滅。二月十二日、戦艦大和、武蔵がバラオに停泊するのを見る。三月初旬、日沖小隊は千五百屯の日の出丸に乗船、ニューギニヤへの補給のため、敵制空下のウエワクに向かう。夜の雷撃で船団の第一船は轟沈し、ホーランジャに入港して空襲をうけ、のがれてウエワクに行き補給を果たした。ホーランジャ経由で基地に帰る命令をうけていたが、船は単独で西航しサルミで給水し、マノクワリに行き、そこでバラオが敵の機動部隊に襲撃され、船は帰るべき基地を失ったことを知る。三月三十日である。入港した別の三隻と共にハルマヘラ島に行き、

四隻で駆逐艦一隻に守られ出航、魚雷攻撃をうけ、日の出丸だけがフィリッピンのザンボアンガにたどりつく。〈ミンダナオ島の西端にあるザンボアンガは小さい漁港で漁船が多く、夕映えの海上を家路を目指す漁船の群の姿は美しい眺めであった。そして教会の古塔が椰子林の上にそびえる風光明媚の町はニューギニヤ以来初めて見る人間の住んでいる町であった。／この港に一週間程停泊して、或る日の夕暮頃、船は単独でセブ島に向かって航行を開始し、岬を廻って愈々内海へ入る頃は夜になっていた。内海へ入れば、もう敵潜の心配はいらない。我々は思わず、ほっとした気持ちになった。翌日船はセブ島に着き、セブで一泊してその翌日マニラへ向かって出航したのであったが、夜セブ島の山で、山焼きする火を見ると思わず涙が出て来た。火は文明の始まりである。我々がマニラに到着したのは四月の下旬であった。我々は憶い出多い日の出丸を下船して陸にある停泊指令部の宿舎に入った。〉

本書には　硫黄島の〝玉砕戦〟から奇蹟的に生還した友人の聞き書きなども収め、又自筆のカットも入れ、一一六頁の小冊ながら「戦争の愚かさ、悲しさ、空しさ」がよくでている。

著者は、わたしの龍谷大学予科入学（一九三六年）以来の友。わたしもあの戦いに同じ愚かさ、悲しさ、空しさを飽きるほど味わってきた者として、この本を造らずにいられない著者の気持ちが、痛いほど分かるのだが、世界のどこかでは相変わらず無意味としか思われない戦いが繰り返され、戦争はこりごりだったはずの日本で、軍隊を拡大し、戦争の道具を増やすために、人々が走り回っているのをみると、戦後間もないころ「人間は滅びるまで戦争をやめんじゃろう」といった、鈴木大拙氏の言葉が、思われてならない。

三浦国雄「上海だより」「文人と養生」1988.9.2. 原田憲雄

「上海だより」は、一九八七年四月二日から九月一〇日までの約五カ月間、大阪・上海友好都市文化交流協定にもとづき、上海大学文学院で研修、祝瑞開という秦漢思想史の専家から一対一の講義を受け、街の広場で気功〈中国式体操〉のレッスンを受け、杭州・蘇州にあそび、福建省に朱子の墓を訪う日々の記録で、『中国学志』坤号に掲載。ある書評で「深い体認をもっと平明に語れたなら」と書いたことのある著者だけに、やさしく楽しく、しかしうわっつらではない遊記となっていて、片っ端から引きたくなるが、ほん二つ三つ。

〈講義の内容は私の目下の関心に合わせて、(1)気の思想史　(2)易伝の思想　(3)馮友蘭の哲学、というものですが、こちらの注文に難なく応じて下さる祝氏の力量は、並大抵ではないとお見受けしました。／大学まで辿り着くのが大変で、上海のラッシュ時のバスやトロリーのすさまじさは乗ってみないとわかりません。特に始発のバス停では、ドアが開くや否や、坐って通勤するべく、みなさんなだれを打って狭い入口に殺到なさいます。どうもこの大都会では謙抑の凹型ではなく、自己を強く主張する凸型のライフスタイルを身につけていないと生き抜けないようです。〉

〈先日…公園で出会った不思議な人のことを書いておきます。その初老の男の人は、両手を腰にあてがって木立の中に立ち、ワッハッハッハと何度も大きな笑い声を発していたのです。何がそんなにおかしいのだろうと、あたりを見廻しましたがそれらしきものは何もなく、かと言って狂人ともみえません。明らかに彼の笑声は彼自身の正常な意志に基づいています。動作といえば、上体を少し前にかがめたり天を仰いだりする程度で、主眼にな

っているのは豪快な哄笑です。これを気功と呼びうるかどうか、疑問視する人がいるかもしれませんが、小生はこれは歴とした気功だと信じて疑いません。〉

著者がいろいろの手続きののち、上海気功研究所を訪い、気功を実地に習いたいと言うと一回七五元〈日本円で約三千円〉外国人専用の紙幣で、といわれての感想。

〈小生が憤ったのはこの銭の問題ではなく、公園で出会った老師にいま気功の手ほどきを受けていると小生が言った時の、柴所長の次ぎの言葉です。なに？公園の気功？　あれはよくない、公園の先生に習っているあなたの気功がどの程度のものであるか、我々が見てあげるから今ここでやってみなさい―。これは小生に対する侮辱だけではなく、中華人民共和国の「人民」に対するブジョクではありますまいか。元来気功というものは、無名の人民によって創造され練り上げられ、人民から人民へと連綿と伝えられてきたもののはずで、官方が権威をかさに着て点数をつけたり選別したりする底のものではないと思います。むしろ官方は民間に頭を下げて学ぶべきでありましょう。〉〈所長さんも相手が悪かった。何しろ小生ときたら、このたび中国にやって来て突如「人民性」に目ざめたのですから。〉

「文人と養生」には「陸游の場合」という副題が付き、『中国古代養生思想の総合的研究』の抜刷である。

〈からだから出発してからだに終わる、本来きわめて具体的なこの養生というもの〉を、現代の気功法と過去の道教的養生法との連続性の面から考察したのが「気の復権―気功と道教」であり、「上海だより」は現代中国で盛行する気功からの類推の一つとも言え、「形而上の庭」（『中国学志』乾号）は朝鮮の十七世紀の農書に掲

載された奇異な庭をてがかりに推測したものであった。本論は、十一、二世紀中国で養生に関心をもった文人として、欧陽脩、蘇軾（東坡）、朱熹（朱子）などをあげたうえで、朱子と同時の　陸游（放翁、一二五一二〇九）の詩文からその養生の方法や結果について述べる。掃除をするのは事々しい按摩などより良いというのや、菜食、薄味、少食、粥、散歩、深呼吸、睡眠などがあげてあるのをみて、いまのいわゆる健康法とあまり変りはないなと思った。わたしは早死にしたいとも思わぬが、長生きしたいとも思わず、健康法など意識してやったことはない。まわりあわせで年中掃除をし、歩き廻り、少しの食べ物で過ごしてきたためか、若い頃は病弱だったのに、もう半年もすれば満七十である。馬齢といいたいが、そこまでもゆかぬ羊齢で、かつては寝る暇も削らねばならなかったのに、いまはまったくの睡生で、お恥ずかしいかぎり。さて。

「赫日瞳瞳として海門に湧く」の句が〈単なる詩的比喩ではなく、陸游の想像力（存思）がとらえた体内の風景〉であり〈彼は体内の海に昇った朝日の熱感を下腹部に感じているはずである〉と聞き、「黄河　直ちに崑崙と通ず。…吾行けば忽ち過ぐ日月の宮」の句に出会っても〈これを実地の旅はおろか空想上の旅と考えてはいけない。これは存思された体内の遠遊なのである〉と読むと、わたしの読み方が〈いけない〉ほうのだったような気がしてきて、もともとありもしない幻の自信が、いよいよ幽霊のように消えて行くのが、おもしろい。…といったような次第で、名を掲げるのは一部に過ぎないが、恵投の論著はいつも愛読している。

※前号正誤　六頁六行　カワラナデシコガ　→　カワラナデシコが　一三頁三行　ほとぎきえ　→　ほとぎも
二四頁一一行　言ぬ　→　言わぬ

二　庶民　竹立　1988.7.21.　原田　慶

自動車屋のおじさんが、音をいっぱいにあげてレコードをかけてくれると、今日もえい坊の踊りが始まるらしい。木の下に敷いたむしろが舞台である。すこし離れたところにも、むしろを敷いて見物席がつくってあるから女の子たちは行儀よく並んで座った。

えい坊は一反風呂敷の旅合羽にざるの三度笠、芝居小屋で見た身振りを適当に真似て、それらしく踊るのだ。同じようなことを繰り返しているが、自信たっぷりで役者になりきっている。

かげかやなぎか、かんたろうさんか
いなはななたに、いとひくけむり

うたの意味はわからなくても、三度笠を振りまわしてみせるだけでかっこうがつく。女の子たちはぽかんと口をあけて眺めている。

えい坊はやさしい子だ、女の子と遊んでくれる男の子はえい坊だけだ。縄とびのなわをまわしたり、ゴムとびでは、逆立ちとびの妙技を見せたり、時々現れてほんの少し遊んで行く。それは妹のミッコちゃんがいるからかもしれない。

おないどしのタカスケなどは、年のはなれた兄さんと二人兄弟だから、めったに外へ遊びに来ない。まだ四年生だのに家にばっかりいて、将棋をさしたり花札をしたり、大きい人とばかり遊んでいて、同じくらいの子ども

たちとは遊ばない。女の子には目もくれない。邪魔になれば後から蹴とばすくらいはやりかねないのだ。

えい坊は馬面にちょっと受け口、もそもそしていて物言いもはっきりとはしないが、人を蹴っとばしたりはしない。タカスケは色白に目もとすずしく、声もりんとしてよくとおる。しかし見かけとすることは大違い、ろくに物も言わずに人を突きとばして行ってしまう。

今日はまた、村の芝居小屋に芝居がかかった。馴染みの一座の役者たちが、旗をたててチンドン屋のかっこうで田舎道をはやして歩く。子どもたちはいつものように、ぞろぞろとついて歩き、太鼓の傍へ寄りすぎて役者にバチで頭をたたかれ、逃げるひょうしに田へ転げ落ちる者もいる。

芝居の出し物はチャンバラもあれば幽霊も出る。国定忠治やねずみ小僧、お岩さんに牡丹燈篭、八百屋お七も湯島天神もやる。子どもにはわけのわからないものもある。それでもたいていの子は、トントントントン、トントントントン、ドドドドドドド、と太鼓が鳴って小屋が暗くなり、青い照明の中でひゅうっと幽霊が出たり、藪の蔭に人がかくれていたり、どきどきするようなことがいっぱいあるから、こわいもの見たさに毎晩、小銭をかき集めて小屋へかようのである。

芝居がかかってから、タカスケが芝居に出るという評判がたって、本当かどうかその日になると小屋は大入りになった。菅原伝授手習鑑、寺小屋の段、松王丸という庭ぼうきを逆さにしたような頭のこわそうな人がでた。その人は、自分の子どもが他の子どもの身代りに、首をはねられるのを、人前では知らぬ顔をしておいて、後から人のいないところで、夫婦で泣いていた。本当はやさしいんだなとちょっとじいんときたが、そんなにしてま

で子どもを殺さなければならないというのがわからない。その首をはねられる子役がタカスケだったというのだが、そうだとしたら当人には、わけがわかっていたのかどうなのだろう。芝居がすんだ後はもとのとおり、使いに出て道を通っても、まわりには目もくれず、風のように家へとんで帰る。あれで芝居に出たなんて本当だろうか。よほどのテレやにちがいない。

旅回りの一座が次の小屋へ移って行って、村の芝居小屋が閉じてしまうと、次はえい坊の出番だ。小さなお客をむしろに集めて、ざるをかざした三度笠が始まる。桑の枝で柄になるところだけ残して皮を剥ぎ、それらしくこしらえた刀を腰にさして、えい坊の勘太郎月夜歌はいよいよ堂に入ってきた。

なりはやくざに、やつれていても
つきよみてくれ、こころのにしき

「ようよう、えい坊日本一。こころ、うん、こころだね」　自動車屋のおじさんが、ひとり納得してはやしたてると、小さな見物たちは顔を見合わせて、パチパチパチと、なんだかたよりない拍手を送っている。

天　狗　さ　ん

1988.8.23.　　原　田　慶

山の登り口には急な石段があり、押し返されそうな気がしながら登って行くと、大きな門があった。その赤い大門を入って、少しゆるやかな坂道を行くと、広い草原にでる。どこに天狗さんがいるのだろうか、草原を通り

過ぎて山に入るともう道はなく、木が茂ってうす暗い、急に日が暮れてきたような気がする。

風が吹いてガサガサと音がするから、木の上を見上げたが、誰もいない。体じゅうを耳にしてじっとしていると、ずっと奥の方でガサガサと音がする。急いで行ってみるが天狗さんはいない。

だいたい天狗さんなんて、じっとしているはずがないのだ。赤い顔をして、長い鼻にぎらぎら光る大きな目、高下駄をはいて、天狗のうちわを持って、山じゅうを飛びあるいているのにちがいない。またバサッと音がするから、今度こそと思って走ってゆくが、誰もいない。こんなことをしてさがしていても、本当に天狗さんがみつかるのだろうか。

一晩じゅう天狗さんをさがしあるいて、くたびれてもう一歩も動けなくなって、大きな笑い声が響き渡ったと思ったところで目が覚めた。

ハッちゃんがねむい目をこすりこすり起き出して行くと、母さんはお弁当のおにぎりをこしらえている。

「おはよう、顔を洗って御飯をたべなさい。着替えは出してありますよ」

急いで顔を洗って食事をすませると、ちょうちん袖のブラウスに着替えた。母さんが、父さんのネルのシャツをもも いろに染めて、何日も夜なべをして、妹とおそろいに仕立てたものだ。

妹のアキちゃんは二年生なのに、三年生のハッちゃんより体が大きくてかわいい。近所のおばさんは、「アキちゃんは色が白いから、ももいろがよく似合うね。でもハッちゃんはなんだか似合わないみたいだ、どうしてだろう」なんて言う。ハッちゃんは心の中で、いまに大きくなったら、私だってきっと似合うようになるわよ、と

思っている。

学校でもアキちゃんは、組でいちばん背が高くて、なんでもよくできるから、級長さんだ。二年生で級長だなんてなまいきだ、とハッちゃんは思う。アキちゃんとけんかをしたら、ハッちゃんはいつも負ける。腕力でいったらぶっとばされるし、口でいっても相手じゃない。泣かされるのはいつもハッちゃんだ。いちばんくやしいのは、アキちゃんがハッちゃんに「しがんだ」と言う時だ。ハッちゃんはたしかに、育ちのよくないトウモロコシみたいにやせてみすぼらしくて、かわいくない。でも妹のくせにそんな本当のことを言うのはよくないにきまっている。でもやっぱり、ハッちゃんもすぐおこりすぎるのかなあ、と思ったりもする。

ももいろのブラウスに着替えてから、ハッちゃんは考えた。もし今日、天狗さんがみつかったら、けんかをした時、アキちゃんに負けないようにしてくださいってたのんでみようかな。天狗さんのうちわで、わたしをアキちゃんより大きくしてくださいって言ったほうがいいかなあ。それにしても天狗さんが本当にいるんだとは思わなかった。お願いを言わないうちに、飛んで行ってしまわないだろうか、もし大きな声でどなりつけられたらどうしよう。ちょっと心配になってきた。

「ハッちゃん」　母さんの呼ぶ声がするので、気をとりなおして玄関へ行ってみると、下谷さんのおばあさんが来て、母さんと話していた。下谷さんは、

「おはようございます、ハツコさん、では出かけますか」

といった。もう仕方がない、ハッちゃんは観念して、下谷さんについて行った。

電車の駅に行って、下谷さんは切符を大人と子どもと二まい買って、すぐに改札を出た。この駅では町へ行く方と温泉場へ行く方と電車がすれ違うから、トントントンと石段を三つ降りて、線路を渡ると向かい側のホームへ上がった。町の方へ行く電車に乗るのだ。

電車は駅を出るとすぐ、鉄橋を渡って川にそって水と同じ方へ走って行く。今日は日曜日だけれど、まだ朝が早いから誰も川原で遊んでいない。電車は川の傍の駅で止まって、そこから急に川に背を向けると山間の方へ走って行く。早く走る人なら、電車から帽子など落としても、飛び降りて拾ってまた飛び乗ることができるというくらい、のんびりと走る電車だけれど、ずっとどこまでも走り続けるのだから、やっぱり電車はえらいとハッちゃんは思う。

でも今日はどうして母さんが一緒に来ないのだろう。下谷さんのおばあさんにハッちゃんを預けて、もし天狗さんに食べられてしまったら、母さんは困るだろう。座席から下にとどかない足を、ぴんとあげたままハッちゃんはそっとおばあさんを見た。下谷さんは、ハッちゃんの方を見てにこっとわらった。おばあさんがあんなに平気な顔をしているんだから、きっと天狗さんとはしたしいんだ。それならハッちゃんをとって食べたり、おおきな声でおこったりしないかもしれない。

ちょっと安心して窓の外に目をやると、階段のようにちいさな田が続いてすぐ山になっている。町まではまだ半分くらいしか来ない山の駅で、電車が止まった。この駅では町から来た電車が、上の方にある駅へ入って、温泉場から来る電車を待っている。下の駅でとまった電車が、町へ向かって出て行くと、上で待っていた電車がバ

ックしてもとの線路にはいってから、温泉場の方へむかって走って行く。単線だから途中で電車がすれちがえるのは、この駅とハッちゃんの村の駅としかない。

山の中の駅で降りたのは、ハッちゃんと下谷さんだけだった。ハッちゃんは今までにこの駅で降りたことは一度もない、下谷さんは山道をさっさとぬけて坂を下ってゆく。こんなところではぐれたら大変だ、ハッちゃんはいっしょうけんめいについていった。坂を少し下りると急に明るくなって、青々とした田んぼの中に、藁ぶきの家が見える小さな村だった。駅からは村が少しも見えないのだけれど、どの家にも大きな木があって、赤い花や白い花が咲いている。しいんとして人の声もしないが、なんだかとても気持ちのいい、美しいところだとハッちゃんは思った。

少し高い土手のうえにある藁ぶきの一軒へ、下谷さんは入っていった。何か話しているあいだハッちゃんは、近くの山を見ながらまた天狗さんのことを考えていた。下谷さんが呼ぶ声がしたので、ふとわれに返ったハッちゃんが家に入って行くと、奥のいろりの正面に小さなおじいさんが、こちらを向いて、あぐらをかいて座っている。下谷さんが「お願いいたします」と頭を下げた。おじいさんはちょっとハッちゃんを見てから、黙ってひばしでいろりの灰をかきまぜるようなことをしていたが、そのまま自分の、のどぼとけのあたりにぶら下がっている、小さな瓢箪のようなものを右手でつまむと、上を向いて目をつぶった。さては天狗さんが飛び降りてくるのかと思って、ハッちゃんは身をかたくして天井を見ていたが何もおこらない。しばらくしておじいさんが目をあけると、下谷さんはもう一度ていねいに頭を下げた。

「外で待っていてください」と言われたので、一人で庭に出て赤い花の木のしたに立っていると、すこしして下谷さんが出てきた。「さあ行きましょうか」と言うからハッちゃんは、下谷さんに小さな声で「天狗さんは」ときいてみた。下谷さんは「ええ、天狗さんがねハツコさんのおなかの中の悪い虫を、みんな追っぱらってくれたそうですからもう大丈夫ですよ、これからは何でもたくさん食べて、ハツコさんもきっと大きくなりますよ。あの天狗さんはとってもよく聞いてくださるんです」と言った。

そうか、あのおじいさんが天狗さんだったのか、知らなかったから、けんかに強くなりますようにとも、アキちゃんより大きくなりますようにともお願いしなかった。赤い顔もしていないし、天狗のうちわだってもたないでひばしで灰をかきまぜただけなんだもん、天狗さんだなんて思わなかった。ハッちゃんはちょっとがっかりして、下谷さんの後から歩いて行った。

電車を待っている間に、下谷さんはハッちゃんの母さんからあずかってきた、おにぎりを出していっしょに食べた。来た時とちがって上の駅で電車に乗ると、町の方へ行く電車が下の駅を出て行ってから、ハッちゃんたちの乗った電車はバックして下の線路までもどって、村の方へ走り出した。ハッちゃんはぼんやり窓の外を見ながら考えていた。

「やっぱりお話に出てくるような天狗さんじゃなかったのか、でも天狗さんがおがんでくれたから、おなかの中の悪い虫がいなくなって、きっと大きくなりますよっておばあさんは言った。そうだ、わたしは大きくなる。大きくなったらもいろのちょうちん袖が、似合うようになる。アキちゃんにぶっとばされないようになる。ハ

ッちゃんの組の級長さんのユキコちゃんは、いろが白くて背が高くて、目がぱっちりしていてきれいだ、隣の組の級長さんのトシエちゃんは、やっぱり背が高くてすこし色は黒いけど、ふっくらして、いちま人形さんとおんなしだ。わたしだってきっとそんなふうに大きくなる。もっといっぱい食べて大きくなる」

ゆうべからの疲れが出て、ハッちゃんはなんだかねむくなってきた。下谷さんのおばあさんも、こっくりこっくりいねむりをしている。ハッちゃんもとうとう目があけていられなくなった。二人が眠ってしまっても、電車は、大きくなる大きくなる、大きくなる大きくなる、とハッちゃんの夢の続きをうたいながら、ゆっくりと村へ向かって走って行った。

最上の光を放つ者 ―法華経巡礼 20― 1988.9.4. 原田憲雄

前号の 1.39.を、正本はほとんどそのまま直訳するが、妙本は次ぎのように簡単に要を摘んで済ます。

次に復た仏あり。亦た日月燈明と名づく。次ぎに復た仏あり。亦た日月燈明と名づく。かくの如き二万の仏、みな同一字にして、日月燈明と号し、また同一姓にして、姓は頗羅堕。弥勒よ、まさに知るべし、初めの仏より後の仏まで、みな同一字にして日月燈明と名づけ、十号を具足す。説くべきところの法は初めも中ごろも後も善し。

正本の約三分の一。これが例の簡潔を好む中国人の趣好に合わせながら、テキストの中心はそらさないクマー

ラジーヴァの翻訳である。経典の翻訳は、一般的にはいよいよ簡潔の方向に、あるいは摘要の方向に、進むであろうが、インド的な繰り返しの中で瞑想し陶酔するのを好む心情は、日本人の中にも無いわけではない。テレビの大河ドラマなどの造り方からその傾向が伺えようし、次々名は変えても本質は同じジャズ、ポップス……が繰り返しの繰り返しによって若者たちをいつまでもいつまでも熱狂させていることから推察して。

1-40. さらにまた、アジタよ、世尊、日月燈明如来、正しい覚りをえたひとには、以前、若くて、まだ出家とならず、家にいた時、八人の子があった。すなわち、(1)有意という名の王子であり、(2)善意という名の王子であり、(3)無量意という名の、(4)宝意という名の、(5)増意という名の、(6)除疑意という名の、(7)響意という名の、(8)法意という名の、王子であった。そうして、アジタよ、八人の王子、あの世尊、日月燈明如来の子らは、広大な威力があり、おのおのが四大洲を享有し、そこに君臨していた。彼らは、世尊が出家したのを知り最上の正しい覚りをひらかれたと聞き、すべて王位と領土を捨て、世尊に従って出家し、すべて最上の正しい覚りを目指し、説法者となり、幾百千の仏のもとで善根を植えた、これらの王子たちは。

tasya khalu punar ajita bhagavataś candrasūryapradīpasya tathāgatasyārhataḥ samyaksaṃbuddhapūrvaṃ kumārabhūtasyānabhiniṣkrānta-gṛhāvāsasyāṣṭau putrā abhūvan / tadyathā / 1 mātiś ca nāma rājakumāro'bhūt / 2 sumatiś ca nāma rājakumāro'bhūt / 3 anantamatiś ca nāma 4 ratnamatiś ca nāma 5 viśeṣamatiś ca nāma 6 vimatisamudghāti ca nāma 7 ghoṣamatiś ca nāma 8 dharmamatiś ca nāma rājakumāro'bhūt / teṣāṃ khalu punar ajitāṣṭānāṃ rājakumārāṇāṃ tasya bhagavataś candra-

sūryapradīpasya tathāgatasya putrāṇāṃ vipularddhir abhūt / ekaikasya catvāro mahādvīpāḥ pari-bhogo 'bhūt / teṣv eva ca rājyaṃ kārayāmāsuḥ / te taṃ bhagavantaṃ abiniṣkrānta-gṛhāvāsaṃ vidt-yā nuttarāṃ ca samyaksambodhiṃ abhisambuddhaṃ śrutvā sarva -rājya-pariṃbhogān utsṛjya taṃ bhaga-vantaṃ anupravrajitāḥ / sarve cānuttarāṃ samyaksambodhiṃ abhisamprasthitā dharmabhānakāś cābhū-van / sadā ca brahmacāriṇo bahu-buddha-śata-sahasrāvaropita-kuśala-mūlāś ca te rājakumārā-abhūvan //

日月燈明如来については、『法華経』に見えるというほか、古い注釈にはつっこんだ説明がなく、布施浩岳氏の『法華経新釈』が示唆に富む。

法華経は経典自身、菩薩法であると宣言しておりますように、信者一般の為に民衆的に説かれたお経ですので、この日月燈明仏と法華経との故事も多分に譬諭的な味をもたせられているものと看なければなりません。日月燈明仏は…太陽系宇宙の光明的な、従って宇宙エネルギー的な或る力の真実的存在性を説明しているものと思われます。大日如来が太陽を意味し、阿弥陀仏が無礙光と呼ばれる仏の光明を意味するように、仏名には智慧或は智慧から発する光明を意味している場合が多いようです。大日如来がそのまま太陽を思わせる如く、日月燈明仏は日月によって代表された宇宙エネルギー的電磁波的存在を思わせます。このような大きな力を霊格化して日月燈明仏と強いて名づけたものでしょうか。そうだとすると、この仏様によって法華経が説かれたとは、法の霊格化された法身仏の存在が日月の光と共に始まり、実存している、ということにな

り、従って、これが無始無終の仏様（法性身）につながります。そしてこの仏様を、智慧を中心にしてその時間的在り方を特に説明しているのが化城喩品に見える大通智勝仏であり、更に之を人間としてのお釈迦様に支点をすえて時間的に解説されたものが寿量品の仏様即ち久遠の本仏であります。

八人の子をもつのは、二万の日月燈明の最後の如来であることを、妙本は示すが、梵本も正本もことわらない。子の名は、日月燈明と同じく、象徴的なものだから、妙本の訳に従っておく。ただ、ここで「意」とするmatiが、『楞伽経』での代表質問者大慧mahāmatiの「慧」にあたり、matiはもと「敬意、祈り、崇拝」の意であることは、注意しておいていいだろう。「そこに君臨していた」に当たる処を、正本が「治むるに正法を以てし、侵枉する所なし」とするのは、中国王道思想の読み込みであり、「最上の正しい覚りを目指し」を、妙本が「大乗の意を発し」とするのは、重複を避ける中国修辞法を顧慮してのことであろう。

1-41. さてまた、アジタよ、そのとき世尊、日月燈明如来、尊敬されるべき、正しい覚りを得たひとは、「大きな教え」という法門、諸仏の護持する広大な経典、ボサツへの教示を語った。そうしてその瞬間、会衆のなかで、大法座に安坐し、「無量の教えの基礎」という三昧に入った、体も動かさず、心も動かさず。世尊が三昧に入るとすぐに、マーンダーラヴァ・大マーンダーラヴァ・マンジューシャカ・大マンジューシャカなど天上の花の大雨が降り注ぎ、あの世尊と会衆上にまき散らされた。またあまねく仏国土に六種の地震がおこり、上下四方に震動し、ひとびとをはげしい動揺に陥れた。

tena khalu punar ajita samayena sa bhagavāṃś candrasūryapradīpa tathāgato'rhan samyaksaṃbuddho

mahānirdeśaṃ nāma dharmaparyāyaṃ sūtrāntaṃ mahāvaipulyaṃ bodhisattvāvavādaṃ sarva-buddha-parigrahaṃ bhāṣitvā tasminn eva kṣaṇa-lava-muhūrte tasminn eva parṣat -saṃnipāte tasminn eva mahādharmāsane paryaṅkaṃ ābhujyānanta-nirdeśapratiṣṭhānaṃ nāma samādhiṃ samāpanno'bhūd aniñjamāne-na kāyena sthitenāniñjamānena cittana / samanantara-samāpannasya khalu punas tasya bhagavato mandārava-mahāmandāravāṇāṃ manjūṣaka-mahāmañjūṣakāṇāṃ ca divyānāṃ puṣpāṇāṃ mahat puṣpavarṣam abhiprāvaṣat / taṃ bhagavantaṃ saparṣadam abhiyavākirat sarvāvac ca tad buddhakṣetraṃ ṣaḍvikāraṃ prakampitam abhūccalitaṃ sampracalitaṃ vedhitaṃ sampravedhitaṃ kṣubhitaṃ samprakṣubhitam //

この文章は1-18.1-19.の文章とほとんど同じで、そこで語られた事といま起こっている事と同じであることを、文章の同一性においても示すので、そのことは続く文節においても同様である。

1-42. さてまた、アジタよ、そのとき会衆にビクとビク尼、信者と女信者、天、竜、ヤクシャ、ガンダルヴァ、アスラ、ガルダ、キンナラ、マホーラガ、人と人ならぬものが集まっていた。また王、小王、軍王、四大洲の天輪聖王が坐っていた。かれらはみな従者を伴い、世尊を仰ぎ見、不思議がり、未曾有のおもいがし、歓喜した。するとそのとき、あの世尊、日月燈明如来の眉間の毛の渦巻きから一筋の光線が放たれた。光は東方一万八千の仏国土に広がり、仏国土はすべてその光に照らされ、あまねく見通せた。それはまさに、アジタよ、今これらの仏国土が見通せるのと同じであった。

tena khalu punar ajita samayena tena kālena ye tasyāṃ parṣadi bhikṣu-bhikṣuṇy-upāsakopāsikā-

deva-nāga-yakṣa-gandharvāsura-garuḍa-kiṃnara-mahoraga-manuṣyāmanuṣyāḥ saṃnipātitā abhūvan saṃ-niṣaṇṇā rājānaś ca maṇḍalino bala-cakravartinaś caturdvīpaka-cakravartinaś ca te sarve sapari-vārās taṃ bhagavantaṃ vyavalokayanti smāścarya-prāptā adbhuta-prāptā audbilya-prāptāḥ // atha khalu tasyāṃ velāyāṃ tasya bhagavataś candrasūryapradīpasya tathāgatasya bhrū-vivarāntarād ūrṇā-koṣād ekā raśmir-niścaritā / sā pūrvasyāṃ diśy aṣṭādaśa-buddhakṣetrā-sahasrāṇi prasṛtā / tāni ca buddhakṣetrāṇi sarvāṇi tasyā raśmeḥ prabhayā suparisphuṭāni saṃdṛśyante sma /tadyathā-pi nāmājitaitarhy etāni buddhakṣetrāṇi saṃdṛśyante //

ビク、ビク尼から転輪聖王までを「四部弟子、諸天世人」と簡略しているのは、愚直なほどの正本としては珍しく、「世尊を見」を妙本が「合掌して一心に仏を観る」と、梵本に無かったらしい言葉まで入れているのは、やはり中国の修辞を尊重しての操作にちがいない。

1-43. さてまた、アジタよ、そのとき、あの世尊に二億のボサツたちが従っていた。この会合で法を聞いていたかれらは不思議がり、未曾有の思いがし、歓喜し、奇異な現象だと思った、大きな光によって輝やいた世界を見て。さてまた、アジタよ、そのとき世尊の教えを受ける者に妙光というボサツがいた。かれには八百人の弟子がいた。あの世尊は三昧から立ち上がり、妙光をはじめとするボサツたちのために、「妙法蓮華」という法門を説き明かした。かれは満六十中劫のあいだ語り通した、同じ席で、体も動かさず、心も動かさず。会衆もまた、同じ席で、六十中劫、世尊から法を聞いた。その会衆はひとりとして、体の疲れ

る者もなく。心の疲れる者もなかった。

tena khalu punar ajita samayena tasya bhagavato viṃśati-bodhisattva-koṭyaḥ samanubaddhā abhūvan / ye tasyāṃ parṣadi dharmaśravaṇikās ta āścarya-prāptā abhūvann adbhuta-prāptāḥ kautūhala-samutpannā etena mahā-raśmy-avabhāsenāvabhāsitaṃ lokaṃ dṛṣṭvā// tena khalu punar ajita samayena tasya bhagavataḥ śāsane varaprabho nāma bodhisattvo'bhūt/ tasyāṣṭa śatāny antevāsināṃ abhūvan/ sa ca bhagavāṃs tataḥ samādher vyuttthāya taṃ varaprabhaṃ bodhisattvaṃ ārabhya saddharmapuṇḍarīkaṃ nāma dharmaparyāyaṃ saṃprakāśayāmāsa/ yāvat paripūrṇān ṣaṣṭy-antara-kalpān bhāṣitavān ekāsane niṣaṇṇo'saṃpravedhamānena kāyenāniñjamānena cittena/ sā ca sarvāvatī parṣad ekāsane niṣaṇṇā tān ṣaṣṭy-antarakalpāṃs tasya bhagavato'ntikād dharmaṃ śṛṇoti sma / na ca tasyāṃ parṣady eka-sattvasyāpi kāya-klamatho'bhun na ca citta-klamathaḥ //

「二億」を、正本、妙本ともに「二十億」とする。大きな数字の翻訳にはよくあることである。億と言うような単位は、ついさきごろまでわれわれの日常に関りのない、つまりは非現実的な数字であった。中国の訳経僧にとっても同様だったに違いない。大きな数字の翻訳がおおざっぱなのは、巨大さが印象に刻まれさえすればよいといった卓見に支えられていたのだろう。億や兆といった数字が日常世界で通用し、感動も恐れも伴わなくなったのは、世界全体が卑小になったしるしではないか。「妙光」は、直訳すれば「最高の光を放つ者」というボサツの名で、やはり妙本に従った。日月燈明の弟子が妙光というのは、光りにおいて連続する。「劫」とは時間の

最長のもので、さまざまな比喩によっても現わせないとしながら、それを単位として小劫、中劫、大劫などといい、二十小劫が一中劫、三アサンキヤ（阿僧祇・不可測の無限）が一大劫とされるが、それぞれに増減があり、ここの中劫を、妙本は小劫とする。劫の比喩は後に有名なのが出てくる。子供のころお経を教わりながら、時間が長過ぎるとこぼすと、日月燈明如来は法華経を六十小劫かけて説かれ、聞いたひとたちはその間、身じろぎもせず退屈もしなかったと、ちゃんとお経にあるではないか。日月燈明如来の姓は頗羅墮とあるではないか。おまえもはらだで如来の子孫、一時間ぐらいの稽古に弱音を吐いてどうすると、父に叱られた。その父が死んで四十五年たっても、『法華経』のここを読むと、場面の深い意味より、そのときの父の声のほうが甦ってくる。四十五年は、劫というような時間の前ではゼロにひとしく、わたしの命だって微塵にさえあたらぬが、微塵も光りに照らされれば輝き舞う。

1-44. そこで、あの世尊、日月燈明如来、尊敬されるべき、正しい覚りをえたひとは、六十中劫の間「妙法蓮華」という法門、ボサツへの教示、すべての仏の護持する広大な経典を説き、説き終わるとその刹那に完全な涅槃にはいるだろうと、宣言した、天、魔、ブラフマー神の世界に対し、沙門、バラモン、天、人、アスラたち大衆の前で、「きょう、ビクたちよ、夜のなかばに如来は、心身を余さず滅ぼし、完全な涅槃の境地に入るだろう」と。さて、アジタよ、世尊、日月燈明如来、尊敬されるべき、正しい覚りをえたひとは、徳蔵というボサツ大士に　無上の正しい覚りをえるだろうと授記し、すべての大衆に告げた。「ビクたちよ、徳蔵ボサツは、わたしにつづいて無上の正しい覚りをひらき、浄心という、如来、尊敬されるべき、

正しい覚りをえたひとになるだろう」と。

atha sa bhagavāṃś candrasūryapradīpas tathāgato'rhan samyaksaṃbuddhaḥ ṣaṣṭy-antarakalpānāṃ atyayāt taṃ saddharmapuṇḍarīkaṃ dharmaparyāyaṃ sūtrāntaṃ mahāvaipulyaṃ bodhisattvāvavādaṃ sarvabuddha-parigrahaṃ nirdiśya tasminn eva kṣaṇa-lava-muhūrte parinirvāṇaṃ ārocitavān sadevakasya lokasya samārakasya sabrahmakasya saśramaṇa-brāhmaṇikāyāḥ prajāyāḥ sadeva-mānuṣāsurāyāḥ purastāt / adya bhikṣavo'syāṃ eva rātryāṃ madhyame yāme tathāgato 'nupadhiśeṣe nirvāṇa-dhātau parinirvāsyatīti // atha khalv ajita sa bhagavāṃś candrasūryapradīpas tathāgato'rhan samyaksaṃbuddhaḥ śrīgarbhaṃ nāma bodhisattvaṃ mahāsattvaṃ anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau vyākṛtya tāṃ sarāvatīṃ parṣadaṃ āmantrayate sma / ayaṃ bhikṣavaḥ śrīgarbho bodhisattvo mamāntaram anuttarāṃ samyaksaṃbodhiṃ abhisaṃbhotsyate vimalanetro nāma tathāgato'rhan samyaksaṃbuddho bhaviṣyati //

二万の日月燈明如来が次々伝えてきたのは「妙法蓮華」という教えだったとすれば、それを説けば如来の使命は終わる。如来の心身は、妙法蓮華経を説くために仮に構成せられた諸要素。使命が終われば、その構成が仮のものであり、諸要素がもともと幻のように、有るのでもなく無いのでもない、つまりは空であることを示すのも、如来の、やはり、使命であろう。だから涅槃、ニルヴァーナ、を示さねばならないのだ。日月燈明の時代が終わっても妙法蓮華経が新しい如来によって説かれるのは、優れた教えも、教えとして現れているかぎりそれは現象であり、諸行のひとつ、ひとびとから忘れられ、無常なるもので、だから説き続けるひとが必要なのであろう。